

加えても一つ足りない心には引くべきものは残っていない

無限と云う固まりが有るとして、それに「1」足すと、無限+1と云う無限より一つ多い物に成るのだろうか？　そもそも、無限とは無限に多いのだから、たった「1」足したぐらいではびくともしない筈だ。多分、数学的には、こんな疑問は解決済みだと思う。無限に「1」を足す事は、何か意味が有るのではないだろうか、思い付いたからである。限りなく無限に近い「無限+1」。だから何なんだ、と、つつこまれそうだが。

青い花

真っ赤なインクで「青い花」と赤い紙に書いたとしたら、それは果たして「青い花」たりうるか？　小説を読むと云う事はこれと似ているのかもしれない。何も意味しないインクのシミを、言葉として・文章として・小説として頁を繰るのは知識と理性が必要だ。その頁に、言葉・文章・小説を読みとるには、猫には、多分(?)無理だろう。しかし、ここにキーボードがあるとして、その上で猫じゃ猫じゃを踊る猫が、シェークスピアの台詞を、打ち出す可能性は0ではない。限りなく0に近いけれど。あるいは、世界の秘密を解き明かすマラルメ的な一つの言葉を、打ち出すかもしれない。偶然に・全く偶然にその場にいたと云ったら、誰も信じないだろうが、本当に僕はその場にいた。

「※※※」3文字のその言葉は、言葉では表せない。「■■■」とでも云おうか、伏せ字ではない。あなたが、読みとれるか読みとれないか、それは分からない。ボルヘスは「アレフ」と云ったっけ。その秘文字は、あなた自身で、見つけて欲しい。仮にその言葉を「青い花」として話を続ける。つまりこの小説は、仮の「青い花」の話であって、本当の「青い花」の話ではない。「青い花」をイメージしてはいけない。花も紅葉もない秋の夕暮れを考えて欲しい。埴谷雄高が「死霊」と呼び、中井英夫が「虚無への供物」と呼んだ物、それを、今僕は「青い花」と呼ぶ。架空の書「青い花」は、こう始まる。

鯨夢

これは、鯨を見た夢ではない。
また、鯨が見た夢でもない。

僕がまだ夢見る年頃だった頃……。いつかは小説を書いてみたいという野望があった。それが既に還暦が目の前にある今になって、書こうという気に再びなった。一つにはこれは遺書の意味もある。今まで何も残せなかったという後悔もある。書けそうな気になった。それで今パソコンに向かってキーボードをたたいているのである。何をどう書こうかという構想があるわけでもなく漫然と……。エッセイでも綴るように思ったことを

素直に。これが小説になるかどうかは置いておいて。筒井康隆が「小説とは何をどのように書いてもよい文章芸術の唯一のジャンルである」と書いた。ならば——。これも小説になるかも知れない。いや、既に小説は始まっている。僕という物語が……。

「ブルース・ブラザース」のサントラを聴きながら、この文章を綴っている。ジョン・ランディスの、この映画が大好きだ。ベルーシが好きで、あまり評判のよくない「1941」も好きだ。映画の話のついでにアラン・レネの「去年マリエンバードで」について書こう。僕のナンバーワンである。何度観ても飽きない。白黒の作品であるが、「七人の侍」・「ヤング・フランケンシュタイン」・「レイジング・ブル」と並んで、かえって素晴らしい出来である。この4作品はカラーでは成立しなかっただろう。さらにヒッチコックの「レベッカ」も付け加えよう。「去年マリエンバードで」は、シナリオとしてロブ=グリエの小説(?)がある。「2001年宇宙の旅」にも、クラークの小説があるが、僕は映画と原作とは別ものだと思っている。それぞれ長所と短所がある。映像には映像の、小説には小説の、イメージーションがあると思う。その上で映画の枠を軽々と超えてしまったのが「去年マリエンバードで」である。登場する大きな古い城のようなホテル。例えば「黒死館殺人事件」・「シャイニング」などが突然始まってもけっしておかしくないホテルである。そう、舞台装置が主人公と云って良い作品は全て、この作品に内包されている。どのようにも解釈できるのが「去年マリエンバードで」である。綾辻行人の「館」シリーズも含めて。ここまで書いてきて次ぎの事が分かった。映画は枠を超えられるけれど小説は枠が広すぎて（或いは枠が無い）超えられない。「聖書」は、宗教であるが文学でもある。クリスチャンの人たちに叱られそうだけど、あえて文学と呼ぼう。僕にとってはだけれど。筒井康隆の「虚航船団」を文字通り「聖書」のように何度も何度も繰り返し読んだ時期があった。この本が一冊あれば他に何もいらないと云うように。あれも一種の信仰だったかも知れない。究極の「私小説」だと思ふ。あらゆる場所やあらゆる物事を記述した一冊の本が実は自叙伝になってしまった事に気がつく様に。だからこの文章も自叙伝になってしまうだろう。僕の記憶は、僕の都合の良い様に改変されている。だから、ありのままと云うフィクションになっているので、小説と呼んでも良いのだろう。

一寸、話は変わる。

ここで短歌などを掲げよう。

僕の短歌の師匠は長岡裕一君である。

恋歌へ

アラビアの古なるや美しき笑みを湛えて訪れる君
微かなる気品漂う首飾り険しき峰の罅の様に
ささやかな静けさの後水兵は咳一つするその闇の中
ターバンを地上に置いて綴る文天使現れ説く桃源郷
夏過ぎてニンフは祈る額付きてネヴァーランドに望みを託し
春来たり向日葵の種含みつつ平和を願う法医学あり

舞姫は嬰兒抱きて向かい合う目と目合わせて黙劇の中
柔らかき命を救え唯心論永久機関は夜に作られ
雷雲や凜と降り立ち留守中の煉瓦造りの牢獄塔へ
我一人韻文作り歌作り酔うや天啓終わり無ければ

ア行からワ行までの「折り句」である。

小説から人生を学ぼうなんて無粋である。「遊ぶ」事が人生なのである。笑う・遊ぶ・考える。人間にしか出来ない事である。僕にとって、これは非常に大事な事である。「遊び」をせんとや生まれけん。

勿論、真剣に人生について考える事も必要だとは思うけれど。また、或小説からは人生について学ぶ事も可能なのだが……。

小栗蟲太や筒井康隆の小説を理想とする僕には、「純」文学が分からない。三浦哲郎や川端康成だって好きなのだけれど。鏡花は認めるのだけれど、どこか僕には他人と違う感性があって、真面目な物・真剣な物を避ける（逃げる）事が多い。これはもう生理的な物でいかんともし難いのだ。

そうだ、なにも変わった事を書く事は無い。今更メタフィクションだ・ポストモダンだ、なんて時代遅れだ。第一どんな実験小説だって必ず先行作品が存在する現在、悪あがきは止めよう。変に小細工をするのは止めよう。僕が書くのだから。僕は好き勝手に進める。時にエッセイになり・短歌を詠い・脱線させて、結構がどう崩れようと知った事では無い。

1964年10月10日「東京オリンピック」が開催された。小学2年のその年、僕は東京へ越してきた。社宅の物干しからジェット機で描かれた5色の輪を覚えている。あの日は晴れていた。青空を背景にした五色の煙が印象的だった。多分その約20年前にB29が飛来して無数の焼夷弾を落としたであろう同じ空に。未来は明るかった。鉄腕アトムの動力は原子炉だった。あの原爆とアトムの原子炉が同じニュークリアだとは認識されていなかった。手塚治虫の架空の21世紀では放射能汚染など全て解決済みだった。現実の21世紀は3.11以降大問題になっている。あの頃の僕は、工場の煙突から排出される大気汚染物質も、海や川に垂れ流されていた廃液も、人体に影響を及ぼす物なんて思わなかった。だから、高校に入ってすぐの頃、学校のそばの公民館で自主上映されていた「水俣病」のドキュメンタリー映画を観たときのショックは相当の物だった。勿論テレビや新聞には報道されていた訳だが、フィルムの生々しい映像が胸に刺さった。「明日は我が身」と云う言葉が現実味を帯びて迫ってきた。未来が暗くなった。何かをしなければと云う気分になった。市民運動にも参加した。「チッソ本社ビル」のテントにも泊まったりした。それでも「逃げる」事は止められなかった。正義がどうあれ気持ちに嘘はつけなかった。半分は加害者だったから。虚無への供物の冒頭の「その人々へ」と云う言葉が響いた。無関心な「善良」な市民。それが加害者だと自覚した。「虚無への供物」は、忘れられない書物となった。

「チューリヒ美術館展」へ観に行った。モンドリアンの実物を初めて観た。凄い物を観てしまった。タブローでは、もうあれ以上は到達出来ない地点まで行ってしまっている。

赤・青・黄モンドリアンの構図にはあるものはないないものはある

僕はこの文章で何をしようとしているのか？ 僕は、何処へ行こうとしているのか？ 原点から少しは移動出来たのだろうか？ ま、いいや！ 深く考えるのは止めよう。柄じゃ無い。無鉄砲に進め！ ノベルとエッセイの境なんて無い。

東京藝大に入りたかった。勿論、絵で生活出来るなんて大それた考えは無かった。友人が何人か合格した。「長岡裕一〇」君もその一人だった。三浪して形だけ私立の美大に入った。

その頃、アルバイトが面白くなり、学校へは行かなくなった。

最近、又、絵を始めた。この方の才能は、未だ残って居る様だ。結構、筆が進む。と云っても、パソコンで描いているのだけれど。何しろ画材もキャンバスも要らないのだから、お気楽だ。結構、僕に合っている様だ。安直な人生・安易な思考。自省を全くしない。大風呂敷を広げ、それを收拾しない。それでも小説は書いて行こうと思う。

(了)

講評（星野）

「ノベルとエッセイの境なんて無い」、まったくそのとおりです。ぼくの敬愛する後藤明生さんという作家は、そんな小説やエッセイばかり書いていました。芸術に関わって生きる青年時代だったのですね。時代は少し遅いですが、ここに出てくる作品や作家名には、皆、ぼくも若いころに熱中したものでした。水俣病に関して、「無関心な『善良』な市民。それが加害者だと自覚した」という一文は、今もまた、福島や差別について繰り返されていますね。最初に文学を書こうとした時のみずみずしさがこの文章にはあふれています。書き続けていると、やがて自分のスタイルが焦点を結んでくるようになるものです。そこに到達するまで、さらに書き続けてほしいです。